The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	巻頭のことば
Author(s)	重成, 基
Citation	デザイン理論. 1963, 2, p. 1-4
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52447
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

巻頭のことば

重　成　　基

造形表現上の問題をデザイナーの立場から一つとりあげてみたいと思う。古い話で恐縮であるが，すでに20年も以前のことである。或る目的があって丹頂鶴の立姿をスケッチをしたことがある。その画稿をもとにして，それを点と線の構成に組みたててみたり，細い線と太い線との交錯にしてみたり，三角や四角の面の重ね合わせにしてみたり，ともかく描いたり消したり，つけ加えたりという工作をつづけたあげく，ようやくまとめた結果が，数本の長短の線と一つの点とで構成された丹頂鶴の姿であった。およそ最初のスケッチとは似ても似つかぬ表現となったのである。したがってそれを誰れにみせても，鶴とみる人はなかったのである。ところが鶴のスケッチから変形したものであることを説明すると，なるほどと肯定するのである。たしかに鶴の立姿が線の構成のなかに感じられるという。ところで問題はそれが鶴にみえるかみえないか，という点にあるのではなくて，その表現のねらいというか，目的の主点とするところは，新しい形態の発見であり，新鮮な感覚表現とそれに対する造形意欲の追求という点にあった。つまりこうした新しい形態の発見は，一次元の世界のみではなく，三次元の世界をも含めてのことであることは勿論であるが，更に次の次元への発展も考えられるのである。が，次元の問題はそれはともかくとして，新しい形態の発見ということは，つまり新しさを認知する度合が人，その人によって緯度，経度の位置の相違があるということである。それともう一つはわれわれは互いに同じ時代に生き，同じ国に生れてよく似た生活様式の環境

に生活しているのである。のにもかかわらず，新しさへの理解が人によって異ることである。例えば私の近しい人から或は全く未知の人からときどき新しい感覚を示され聞かされて，おどろきを感じるときがある。そしてその次には自分自身の知性度のひくさを恥ずかしく思うことがあるのである。これは緯度・経度の表面的素因の相違だけではなく，もっと深層にあるところの造形計画・制作を中心とした思考・練想といったその人のみがもつキャラクタリゼーション（特質）の高低の相違に他ならない。

絵画や彫刻はものの状態をそのままに写しとる，または再現するということにはじまって，社会・思想・科学などの理念と，そしてテクスチュア或はテクニックの新しい表現手法とに，影響されて，或はまた逆にあまり影響のないままに，さまざまな流れとなって，そのうちの一部は超現実的な，或は非具象的な，或はその他の新造形的なものとなって生れてきたのである。それらの新しい形式による作品をみわたしてみて，さて定着したものがどれほどあるであろうかと思う。作品というものは何も定着しなくともよいではないか，ともいえるのであるが，時間的・空間的なものが作品の価値を変化させるものである。

またもう一つには作品の定着は消極的な考え方であって新しい進展がなくなり，停滞するということが心配されるのである。が，しかしこれは定着の連続ということがあるから問題ではないと思う。このようなことを考えながら，また他にもこれに類したことを考えながら，新しい形態の発見につとめようとするのである。しかもこの努力の方向はやがてデザイン（デザインとは何を意味するかの定義が必要であるが，それは他の機会にゆずるとして，ここでは絵画・彫刻などを除いた造形表現と解釈する）の道につながりを生ずるのであって，そこに現在の或は将来への示唆をみいだすのである。例えばかつてのコンストラクショニズムは，建築デザイン・室内装飾デザインその他のすべてのデザインの分野に，大なり小なりの影響を与えているといえよう。それからまたモンドリアン（Piet Mondrian）の作品は＜花をもつりんご樹（1912）＞には

じまり，その後いくつかの＜コンポジション＞の作品につづき＜桟橋と海洋（1915）＞＜線の構成（1917）＞＜色面構成（1917）＞＜赤・青・緑の構成（1920）＞を経て，1921年以後の作品＜コンポジション＞の定着的作品が百数十点もつくられ，そして＜ブロードウエイ・ブギ・ウギ（1943）＞＜ビクトリー・ブギ・ウギ（1944）＞にいたっては，極端にいえばグラフィック・デザインにおいていうところのレイアウトの基本的原則「分割・配分」というものそのものである。

しかしながら，前述の「やがてデザインの道につながりを生ずる」とかいたことは，文章の表現がまづくて少し誤解をまねくおそれがあるので更に説明をつけ加えて，私の考えを多少でもより正しく了解してもらいたい。それは即ち造形意慾というものは人間本能のうちの一角であって，一般にいわれている本能でもそうであるが，本能の強さには個人差があることである。そしてその本能的な造形に対する場合のあり方に，本末とか前後とかの相違があろうはずがないのである。つまり「つながり」は造形の上で共通のものがあるということであり，同一のものであるということである。ここに二枚の同じ大きさのカンバスがあったとする。同じ形，同じ色彩の「点」がそれぞれに描かれたものとすれば，一枚に描かれた「点」は，その作者の主観や個性によって，ほとんど自由な状態において，点から発展するところの作品（絵画）を制作する。ところが他の一枚に描かれる「点」は主観や個性については同様であるが，作品をみせる対象者があって，しかも対象者に対してある目的を達しなければならない作品（ポスター）である。とすれば同じ「点」であっても，その「点」のもつ内面的性格が異るために，同じ「点」の造形表現であるにもかかわらず，表現価値の軽重を問われるのである。

こうした造形表現上の問題は，かねて建築の分野においても「建築設計」と「建築デザイン」という言葉の相違と，またそれに付随した仕事の内容についても同様の問題がある。

例えば最近話題になっているグラフィック・デザイナーが参加して好評を博しているところの館林市庁舎の色彩計画や，出雲大社の「庁の舎」のドア・デザインなどは，デザインの重要性を立証する好適例に他ならないのである。その他のデザイン各分野におけるデザイン・セオリーの検討ということは，現在の世情からみてデザイン界の最重要事であるといっても過言ではない。

デザイン理論第2号刊行におたって，この冊子がどうかそのようなプロブレムに対して大いに役立つことを念願するものである。

執筆者紹介

重成　基	京都学芸大学教授
中西　徹	京阪電気鉄道KKビル経営部勤務
青山武雄	萬年社名古屋支店嘱託
片山行雄	元京都市工芸指導所工芸部長
山崎勝弘	奈良女子大学教授
向井正也	神戸大学教授
城　貞男	美術大学講師